

# Twitter を利用した小説作品の展開について ——白石一文『翼』を中心に

櫻庭太一（専修大学商学部・文学部）

A well-known novelist started using social media a case of “TSUBASA”  
by Kazufumi Shiraishi

Taichi SAKURABA (School of Commerce, School of Letters, Senshu University)

Social media (ex. Facebook and twitter) are changing the world with rapid growing smart-phones and tablets. In particular, reading books or newspaper by tablets and smartphones have become to be done by many people. This is one of the most important changes in recent years. It had already spread the global, and now is seeking a way to be innovative as a medium. Since several attempts have already been made, but there are not much examples at present, the evaluation has not been done yet.

This paper covers a challenge by Kazufumi Shiraishi, re-publishing one of his works on twitter since May 2013, and its ripple effects in social media. His case could be a role model for other well-knowns.

キーワード：ソーシャルメディア，ソーシャルネットワーキングサービス，ネットコミュニティ，twitter，出版

**Key words** : Social media, Social Networking Service, Internet Community, Twitter, Publishing

## はじめに

昨今、社会におけるソーシャルメディア、ことに Facebook, twitter, mixi 等 Social Network Service (SNS) と呼ばれるサービス群の利用は「急速な拡大期」を通過してもはや定着期に入ったと言える。さまざまな年齢・職業・嗜好層がその中で日々新たな情報を生成しながらコミュニケーションを行うだけでなく、映像や音楽、テキスト作品もそれらのサービスを通じて享受する環境もまた普及してきた。

現在ソーシャルメディアユーザーの多くが、そこで配信される作品をただ単に「受け取る」だけでなく、その作品を紹介して他のユーザーとコミュニケーションを取り、あるいは自身の情報（作品）を生成して新たにネット上に送り出している。対する既存メディア側もそうしたユーザー活動に対応した作品提供のあり方について試行錯誤を続けている。本稿では、そうした活動の中でも特にテキスト作品に焦点をあて、2013年5月からおよそ3ヶ月間にわたって「twitter連載」された作家・白石一文の作品『翼』を採り上げながら、ソーシャルメディアにおけるテキスト作品の展開とその特性について報告をしていきたい。なお、本稿で採りあげる各サービス及びコミュニティの名称、内容は2013年9月末時点のものである。

## 1. SNS（特にツイッター）概況

総務省刊行の『情報通信白書』平成 25 年度版<sup>1</sup>によれば、日本のインターネット利用人口は平成 24 年末時点で 9,652 万人、人口普及率 79.5%（13 歳から 49 歳までの世代別普及率では 94% から 97%）に達している（図 1 参照）。また『ソーシャルメディア白書 2012』<sup>2</sup>では、調査時点は遡るものの、インターネットユーザーのうち twitter, Facebook, mixi, Blog, GREE, mobage 等いずれかの主要コミュニケーションサービス（いわゆる SNS 中心）の利用率は女性・10 代の 85.1% を筆頭に全体で 57.3% に達している。

再度『情報通信白書』から引用すると、近年急速に普及しているタブレット端末・スマートフォンの利用についても、スマートフォン利用率は 31.4%、タブレット端末利用率は 7.9% とともに昨年度（平成 23 年度末のデータ）のスマートフォン 16.2%、タブレット端末 4.2% から倍近い伸びを示しており、自宅のパソコン（59.5%）や携帯電話（34.1%）からの利用も前年度から継続して高いものの、インターネット接続環境、利用シーンが大きく変化している傾向が見て取れる（同じく図 2 参照）。特にスマートフォンからのネット利用は従来の携帯電話（フューチャーフォン）からの利用にほぼ並び、さらに追い抜く動向にある<sup>3</sup>など、インターネットをより多様かつ普遍的に利用できる環境が普及しつつあることが示されている。

先に述べたソーシャルメディアと同様にスマートフォンの利用拡大傾向は特に若年～青年層において顕著であるが、これは単に「新しい携帯端末機種に乗り換えている」ということだけでなく、端末を通じたネット利用の傾向にも大きな影響を与えている。

同白書に掲載された総務省情報通信政策研究所および東京大学大学院情報学環橋元良明らの調査<sup>4</sup>によれば、10 代から 60 代までのスマートフォンユーザーとフューチャーフォンユーザーのネット利用時間を比較すると、「メールを読む・書く」、「ブログやウェブサイトを見る・書く」、「ソーシャルメディアを見る・書く」、「ネット動画を見る」など各利用シーンの項目すべてにおいて前者の利用時間が後者のそれを 2 倍近く上回っているという（図 3 参照）

10 代から 20 代の調査対象で閲覧・書き込みを含めたソーシャルメディア利用時間においてスマートフォンユーザーとフューチャーフォンユーザーの差が大きく、若年層のネットおよびソーシャルメディアの利用度合いにスマートフォン所有の有無が与える影響が顕著であることが示された。（特に 10 代においては通話も「LINE」<sup>5</sup>のような交流サービスが提供する無料通話機能を利用する傾向があると推測している）

こうした状況は、今後若年層におけるスマートフォン利用が拡大すると共に、パソコンと遜色ない通信速度とソフトウェア、そして写真や日常の活動記録をすぐにネット上にアップできる（する）環境を獲得するであろうことを示唆している。すなわち、ソーシャルメディア利用が特に若年層においてより拡大しており、同時にソーシャルメディアを情報・商業展開の起点としたメディア媒体が今後より本格化していくであろうことが推測できる。

<sup>1</sup> 総務省ウェブサイトにて公開 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/index.html>

<sup>2</sup> 翔泳社、2012 年 2 月

<sup>3</sup> 平成 23 年末の国内ネット接続時におけるスマートフォン利用率は 16.2% であったが、平成 24 年末には 31.4% と倍近い伸びを示している。同様にタブレット端末も平成 23 年末の 4.2% から 24 年末には 7.9% と高い伸び率を示し、ネット接続環境が高機能モバイル機器中心に移行しつつあることが明らかになった。

<sup>4</sup> 『情報通信白書 平成 25 年度版』P. 341-345

<sup>5</sup> 本稿第 7 節にて詳述

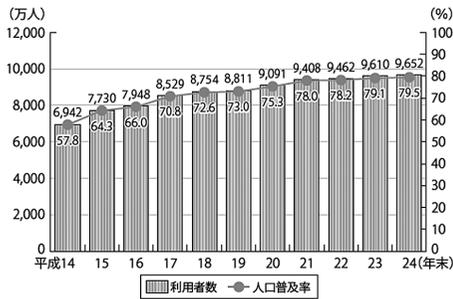


図 1

(出典) 総務省「平成 24 年通信利用動向調査」  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html>

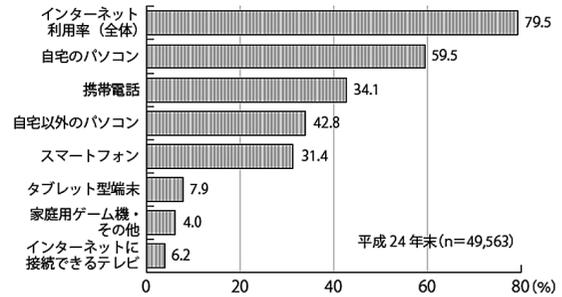


図 2

※当該端末を用いて平成 24 年の 1 年間にインターネットを利用したことがある人の比率を示す  
 (出典) 総務省「平成 24 年通信利用動向調査」  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html>

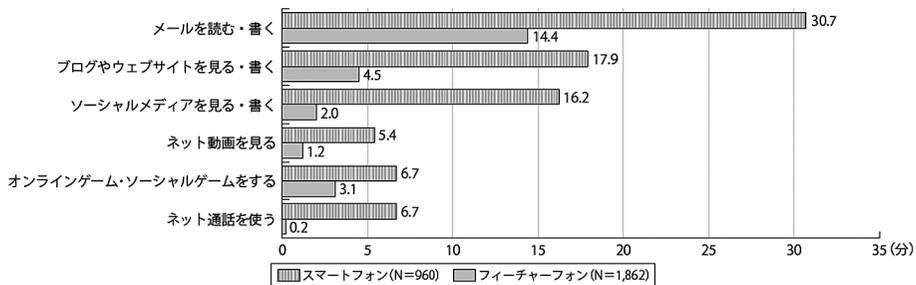


図 3 スマートフォンとフィーチャーフォンのネット利用項目別比較

(図 1～図 3 の表はいずれも『情報通信白書』平成 25 年度版の p. 332, p. 344 から引用した)

## 2. twitter の普及と定着

このように、「ソーシャルメディア」市場とその利用形態は急速に規模と多様性を増しつつあるが、近年の急速なユーザーの拡大から、交流・広告ツールとしての利用が個人や民間企業のみならず公的機関・団体においても定着しているソーシャルメディアの筆頭として、「twitter」(<https://twitter.com/>)が挙げられる。同サービスについては昨年本誌に発表した研究ノート<sup>6</sup>において触れているため、ここでその詳細について触れることは避けるが、twitter は 140 文字という情報量の制限を逆に「手軽さ」「コメント、交流のしやすさ」としてアピールし、タイムライン上に次々と短い情報を表示することで速報性やウェブサイトやブログ、他の SNS といった「本体」への誘導力を強みとするサービスを確立した。そのことが mixi 等日記のような形式で自身の記事を作成していく従来のソーシャルメディア (SNS) サービスとの差別化となり、より手軽な情報発信・交流を望むユーザーの獲得へとつながっている。

以下に主な公共組織・団体のツイッターアカウントを挙げるが、こうした不特定多数に向けて情報を発信する機会の多いユーザー (団体含む) にとって twitter は極めて利便性の高いサービスといえる。

### ● 主な公共機関・団体のツイッターアカウント<sup>7</sup> (2013 年 9 月時点)

首相官邸 (災害情報) : [https://twitter.com/Kantei\\_Saigai](https://twitter.com/Kantei_Saigai)

<sup>6</sup> 「ソーシャルメディアの普及とテキスト作品制作・流通の変化について」(『情報科学研究』No. 33, 2012)

<sup>7</sup> 参照: 「Twitter を活用した情報発信の強化に向けた連携に関する協定」(2013 年 2 月 25 日) <http://www.metro>

総務省：[https://twitter.com/MIC\\_JAPAN](https://twitter.com/MIC_JAPAN)

警視庁警備部災害対策課：[https://twitter.com/MPD\\_bousai](https://twitter.com/MPD_bousai)

東京都庁広報局：[https://twitter.com/tocho\\_koho](https://twitter.com/tocho_koho)

また、既存の電子掲示板やメーリングリスト等と比較して、返信やリツイート（RT）等の機能を駆使することで発信者とのやりとりや情報の周知拡散がより柔軟に行えること、さらには（情報源としての正確性・中立性に対するリスクとなる可能性もあるが）「気に入った情報、コメントのみを拡散する」ことも可能であるといった強みを持っている点も、twitter が交流・情報サービスとしてその地位を確立した要因として挙げることができよう。当然ながら、この特性は個人間のコミュニケーションや公共機関情報の周知だけでなく、民間企業さらには作家によるコンテンツ情報の広告・配信にもその用途を広げている。

こうした twitter の特性は、その当初から各メディア企業、作者と読者との交流用途に活用できるものとして注目を浴びた。今日、前述のように出版社や映像コンテンツ事業者、またコンテンツ著作者が twitter アカウントを持つことは一般化しており、広告宣伝や読者との交流に広く利用されている。こうした環境を利用して、小説等のテキストコンテンツを発表する試みはすでにさまざまな作家、出版社によって行われているが、次項ではその中でも「既発表の自作小説を twitter 上で全文公開する」という形態を行った小説家・白石一文とその活動について採り上げていく。

### 3. 『翼』のあらすじと解題

白石一文は 1958 年生まれ。1992 年に瀧口明の筆名で書いた『惑う朝』で第 16 回すばる文学賞佳作を受賞の後、2000 年に『一瞬の光』を発表。同作以後筆名を白石一文とする。2008 年に『この胸に深々と突き刺さる矢を抜け』で第 22 回山本周五郎賞を、2009 年に『ほかならぬ人へ』で第 142 回直木賞を受賞している。なお、父は同じく直木賞を受賞した小説家の白石一郎である。

本稿で採り上げる『翼』は、白石が光文社の書店向け販促誌「鉄筆」平成 23 年 3 月 1 日号から 5 月 1 日号まで連載した中編小説で、「死に様」をテーマとした競作小説の一遍として発表された（他の作品は佐藤正午『ダンスホール』、土井伸光『光』、荻原浩『誰にも書ける一冊の本』、藤岡陽子『海路』、盛田隆二『身も心も』）。単行本は同社より 2011 年 6 月に刊行された。作品あらすじを以下に掲げる。

#### 【『翼』あらすじ】

東京の光学機器メーカーに勤務する主人公・里江子は夏風邪の診察のため訪れた病院で大学時代の知人・長谷川岳志と再会する。岳志は里江子の友人である聖子の夫であり、また学生時代の里江子にプロポーズをしたことのある男でもあった。上司である坂巻との対立や離婚し放恣な生活を送る弟に疲弊させられる毎日を送る中で、里江子はだんだんと岳志との精神的な交流を深めていく。ともに機能不全の家庭に育った二人は互いの虚無感や孤独について幾度も語り合うが、現在の生活を「嘘だらけの人生」といい、「真実の人生」を見つけないと話す岳志に里江子は戸惑いつつ、信頼する上司だった城山や弟と離婚しながらその子を妊娠した義妹・朝子のことを思い浮かべる。ある日、里江子は聖

子から岳志が家庭を捨て自分と結婚したいと言い出したこと告げられ、もう二度と彼と会わないよう要請される。その真偽を確かめるために岳志に電話をかけると、彼は「僕は家族なんてちっとも欲しくなかった」「きみと共に生きて、きみと共に死ぬ。僕の人生にはそれしかないと思うんだ」と語るが、里江子は「誰かの不幸を前提にした幸福なんて、この世界に存在できるはずがない」とそれを拒絶する。しかし城山がかつて坂巻の姉美代子と熱烈かつ悲壮な愛に生きようとしたこと、またジョエル・ミラーの作品タイトル「我が心にも千億の翼を」に衝撃を受けるなかで、ただひたすらに純粋な愛情とその結びつきを求める岳志の心を理解するようになっていく。その思いを振りきるようアメリカに転勤し岳志との交流を絶った里江子だったが、ある夜から「真っ黒な大きな翼」を背中に生やした彼の姿を幾度も夢に見るようになる。不思議な予兆を感じ日本に連絡をとった彼女は、岳志が自殺を図り重体に陥ったことを知らされ、急ぎ帰国する。いまさらのように愛する人へのひたむきな想いに殉じ、そのことによって「生きよう」としていた岳志の姿に打ちのめされた里江子は、自分の孤独が愛する人を、そして自分自身を殺したと感じ深い絶望に打ちのめされる。

純粋で熱烈な愛とそれを貫くことによって自己の存在の「自由」（作中では「翼」というキーワードに象徴させている）を獲得しようとする男の姿と、彼の思いに応えることを逡巡する主人公女性の視点を通じて描いたもので、「家族」や「結婚」という社会・人間システムの不全とその中で不器用に、しかし自らの感情や意思に率直に生きようとする人々を描いている点は、直木賞を受賞した『ほかならぬ人へ』<sup>8</sup>と同じモチーフであると言える。『ほかならぬ人へ』が最終的に愛する人（最初の結婚・離婚を経て強い結びつきを得た上司の女性）との死別という悲劇的結末を迎えながらも自己の思いと生き方を全うすることの出来た主人公の姿を描いていた一方で、本作は孤独と人間関係の不全を感じつつ、過去の体験から愛情というものを上手く受け止めることができない主人公が、偶然再開した（かつて自分に求婚をした、そして親友の夫でもある）男からの熱烈で純粋な愛に気付きながらも、それを受け容れることができずに死別し、孤独の中に一人取り残されるという悲劇的な物語となっている。一見、「死に様」をテーマとした競作小説としてふさわしい展開であるようにも思えるが、作者である白石自身は本連載のツイートで「今思えば、大久保さん（論者注：『翼』初出にあたっての担当編集者）の望んでいたものと『翼』は少し違った作品だった気がする。僕自身も、正直、そのテーマを強く意識して書いた作品ではなかった。」<sup>9</sup>と発言し、続けて本作のテーマを次のように語っている。（以下、白石によるツイートについては投稿アカウント名と日時、URL を付記する。その他の人物によるツイートについても同様）

重々分かってはいても、決して実現実行することのできなかった生き方を、後に続く人にはそうして欲しくはないと念じて書いた小説だった。その点では死を描くのではなくまるごと「生」を描いた小説であった。人は誰かを不幸にしないために生きるのではなく、自らが幸福になるために生きるべきだと→

(kaz\_shiraishi,2013-07-30 18:48:35 [https://twitter.com/kaz\\_shiraishi/status/362147702869463040](https://twitter.com/kaz_shiraishi/status/362147702869463040))

僕は『翼』を書いているときずっと思っていた。誰に遠慮することなく、堂々と自分の思うままに生きてほしいと、僕はただ言いたかった。若いとき、僕も誰かに強くそう言って欲しかったから…。

<sup>8</sup> 祥伝社より 2009 年 11 月に単行本刊行

(kaz\_shiraishi,2013-07-30 18 : 50 : 24 [https://twitter.com/kaz\\_shiraishi/status/362148160287674368](https://twitter.com/kaz_shiraishi/status/362148160287674368))

ここで、白石がこの作品で描こうとしたのは「死に様」ではなく、むしろ「生き様」であることが示されている（ここで作者が感じているテーマ企画との“齟齬”は本作を twitter 展開する上での重要な動機になっていると思われるが、その点については次節で触れる）。

これは物語の展開と反した意図であるようにも思われるが、本作で描かれた現代的な家族や社会・職場において強い疎外や孤独を感じ、それらがもたらす「理不尽」の中に生きる登場人物がそれを乗り越えようとする姿（最終的にそれを果たすにせよ、果たせぬにせよ）と、そこに人間が「生きる」ことの意味と主体性を見いだそうとする視点は、主人公である里江子と登場人物（そのいずれもが自身の生き方になんらかの不全感を持った人物として描かれる）を通して繰り返し登場している。例えば主人公・里江子は信頼する上司の城山と、彼が職場を離れる際に以下のような会話を交わす。（以下、ツイート上の『翼』本文からの引用については twitter 連載時に付加された「翼 00-00」の形式で通し番号を示し、URL については省略した）

「要するに、自分が死ぬのも、自分と関わりのある人間が全員死んでしまうのも同じだと田宮は言っているわけだ。実際の話、この世界に自分一人生きていたとしても、そんなの生きてるとは言わないだろうからな」

「ただ、その人に過去の思い出があれば、ちゃんと生きていることになるんじゃないですか」

と私は言った。そして、

「たしかに自分のことを最も深く理解してくれている人間の死は、自分の死と限りなく近いのかもしれないね」

と付け加える。そうやって口にしながら、これはいままで見落としていた大切な真実ではなからうかと私は感じていた。

(翼 15-40～15-42)

また、自身の熱烈な愛情を受け容れることをためらう里江子と最後に対面する場面で、岳志は次のように語る。

僕は思うんだ。運命の相手とは会おうだけじゃきつと駄目なんだよ。最も大事なことは、この人が運命の相手だと決断することだ。そう決める覚悟を持ったときに、初めてその相手は真実の運命の人になるんだと思う。

たった一人、この人とだけ生涯仲むつまじく暮らしていくんだ、と決める。たった一人、この人とだけ真実の喜びを分かち合うんだ、と決める。

そしてそれを万難を排してやり遂げようとする。お互いがそういう覚悟を持ちつづけている限り、人生というのは果てしなく豊かになっていくんだと僕は信じている

(翼 21-62～21-64)

本作では主人公の里江子が自己や周囲の精神的不全を感じ、そのことを見つめる役回りを担っているのに対し、彼女を熱烈に愛する岳志はその彼女に「何が“生きる”ということか」を考えさせる役割を担っている。前半部の引用で里江子が語る「自分のことを最も深く理解してくれている人間の死は、

自分の死と限りなく近い」という言葉は、本作の終盤において彼女自身が抱く心情そのものであり、本作のテーマとして提示される言葉でもあるが、対する岳志の最後の言葉はそれに対して「では、どのように“生きる”べきか」を提示する役割を担っている。最終的に岳志はその言葉を全うせずに自らの命を絶つことになるが、同時にそのことが里江子に「生きるとはどういうことか」、そして岳志がどのように生きようとしたのかをまざまざと理解させるきっかけともなっている。

すなわち本作は「生きること」をめぐる対話と、「自分がいかに生きていないか」、すなわち「死」を通じて「生」を照射する構造を持った物語であり、その点において白石本人が語るように「死に様」よりもむしろ「生き様」を描いた作品であると言えよう。さらに言い換えれば、「生きる」ことが許されない理不尽な社会の中であくまで「生きよう」とあがく人物の姿を、彼を受け止めることのできなかった人物の視点から描いた「生きることをめぐる悲劇」であるとも言える。(いずれにせよ、白石が本作の完成にあたって当初依頼されたテーマとの違和感を覚えたことはごく自然であるように思われる)

同時に、そうした「理不尽」の中での生き方を、いわゆる「根性論」や上昇志向といったマチズモ的思考によってではなく、あくまで弱く、繊細（時に身勝手）な人々の視線から見いだしていこうとする方法論は、先に挙げた『ほかならぬ人へ』でも示されるとおり白石が小説作品を通じて現代社会とそこに生きる人々を描く際の通底した作法であり、同時にそのことが彼の作品の今日性、そして今日の読者への訴求力につながっていると言える。

#### 4. なぜ twitter で「連載」されたのか

そして、こうした点を踏まえつつ本作を俯瞰したとき、当然ながら次のような疑問が浮かんでくる。前述の通り、『翼』は光文社の書店向け販促誌に連載されたのち同社から単行本化されたもので、いわゆる「twitter オリジナル」の作品ではない。また白石自身の経歴も、出版社の記者、編集者を経て第16回すばる文学賞佳作を受賞しデビューするというある種オーソドックスなものであり、これまでネットとそのコミュニティをメインフィールドに活動してきた作家ではない。では、twitter 上に既発表作品を全文公開するという企画はなぜ生まれたのか。論者はここに、前節で引用した『『翼』という小説は、光文社じゃない方がよかった<sup>9</sup>』という白石の発言から垣間見える作家と出版社の「ミスマッチング」、そしてそれをソーシャルメディアを利用して作家の側から自発的に調整しようという試みが見えてくると考えている。

前節の引用と重複するが、白石の「光文社じゃない方がよかった」というツイートの全文は以下の通りである。

毎日、少しずつ読みながら、『翼』という小説は、光文社じゃない方がよかった気がする。作品と版元との相性があると最近感ずるようになった。

(kaz\_shiraishi,2013-07-30 18:04:16 [https://twitter.com/kaz\\_shiraishi/status/362136548529029120](https://twitter.com/kaz_shiraishi/status/362136548529029120))

また、続けて競作のテーマであった「死に様」と本作の内容に齟齬を感じていること、そして自身も「そのテーマを強く意識して書いた作品ではなかった」（脚注8を参照）と認識していることを明

<sup>9</sup> kaz\_shiraishi 2013-07-30 18:04:16 [https://twitter.com/kaz\\_shiraishi/status/362136548529029120](https://twitter.com/kaz_shiraishi/status/362136548529029120)

かしている。白石のこうした作品の内容、出版環境との齟齬についての不満は、本 twitter 連載を採り上げた 2013 年 5 月 28 日の読売新聞朝刊記事「代表作 無料でツイッターに 白石一文さんの『翼』でも以下のように報じられた。

「書き終えた時に、初めて達成感を持てた」小説で、自ら「僕の代表作」と呼ぶ作品にもかかわらず、東日本大震災で発売時期がずれたことなどもあって売れ行きは芳しくなく、「採算を度外視してでも多くの人に読んでほしい」の思いが湧き上がったという。

前掲の引用で白石が「光文社じゃない方がよかった」と語る背景には、後の「売れ行きは芳しくなく」という読売新聞記事の言及からも推察されるとおり、一義的には『翼』という作品が期待したほど読者の元に届かなかった（＝売れなかった）、少なくともその数に白石が不満を持っていることがあると言えよう。こうした作家と出版社側の作品執筆、展開をめぐる「ミスマッチング」の例は従来から無数に存在したが、現実的な問題として「作者」が「読者」に自分の作品を届けるため、特にプロフェッショナルとして創作によって収入を得るためには出版社、あるいはその機能をもつコンテンツプロバイダーに依頼することが不可欠となっていた。そして当然ながら出版社によってその扱う内容や取次、書店等書籍となった作品を流通させるネットワークへの影響力はそれぞれ異なり、さらに同規模・同程度の知名度を持ち類似したジャンルの作品を中心に扱う出版社であってもその読者層に違いが出てくるなどを考慮せねばならない、あるいは読者への訴求力の面で制限を受ける要素が無数に存在した。

こうした状況下で「作品制作や展開、読者との交流により積極的に関与できる環境」を作り手の側が模索するのは当然の動きであると言えよう。特に 2010 年以降、高機能端末の投入とコンテンツ投入の本格化によって電子書籍市場が活性化すると、これを好機として独自の作品提供、出版環境として活用しようとする作家側の動きが見られた。

代表的なものとしては、作家の村上龍が 2010 年（Apple 社の iPad が発売された年）に電子書籍の制作・出版を行う会社「G2010」をソフト開発会社のグリオとの折半出資で立ち上げたケースなどが挙げられよう。また『ブラックジャックによるしくじり』、『特攻の鳥』等の作品で人気を博したマンガ家の佐藤秀峰が出版社とのトラブルの末に自作の公開と二次利用フリー化<sup>10</sup>、作家個人での作品流通の道を模索するなどのケースが目された。

これらはいずれも、ネット普及とウェブサービスの機能拡大が進んだ結果、作品流通や宣伝といったこれまで作家自身に関わるのが少ない（あるいはその機会を提供されてこなかった）領域の活動についても能動的な関わりをもつことが可能になったことによるもので、国内でインターネットが普及・定着した 1990 年代末にも（当時のサービス、インフラを利用する形で）同様の動きが出ている。

近年ではさらに書籍販売大手の Amazon による Kindle Direct Publishing<sup>11</sup> など、既存の出版社を「中抜き」する形で著作者が直接作品を制作・販売するプラットフォームを提供する動きが活発になってきている。既存の出版社を中心とした書籍制作と流通システムも依然として大きな力を持つてはいるものの、2000 年代から続く出版市場の漸減・縮小傾向と一部のヒットした作品、安定した成果を見込めるジャンルへの依存傾向の高まりなどから、多様な作品が提供されにくい出版環境が定着してしまっているのが実情と言えよう。その結果として、出版社提供コンテンツからより柔軟で多様なコンテン

<sup>10</sup> 製版マスターデータについては有料。その他利用時の規約については以下 URL にて公開している。http://mangaonweb.com/creatorDiarypage.do?cn=1&dn=34417

<sup>11</sup> https://kdp.amazon.co.jp/self-publishing/signin

ツ提供が行える（少なからず知的所有権、著作権面での問題を含むものの）ネットサービスとそのコミュニティ活動への読者流出が起きている。一方で、作家の側と出版社（コンテンツホルダー）側との執筆方針や流通をめぐる「ミスマッチング」問題も起きやすい状況となっている。これは出版社側の制作能力の減退や手落ちというだけでなく、先に述べたようにウェブサービスの充実によって、作家の側が「もっと作品を読者に届かせる方法があるのではないか」という疑問とその対応に能動的に関わる機会が増加したことが大きな要因と言えよう。

本節冒頭で挙げた白石の『翼』という小説は、光文社じゃない方がよかった気がしている。」という発言も、そうした「ミスマッチング」を作者が読者に対して率直に明らかにしたことに示されるように、そうした作家にとっての不満・意図を打開あるいは補完する手段として twitter をはじめとしたソーシャルメディアを利用することが一般化しつつあることの現れであると言えよう。

## 5. Twitter による小説作品展開の特徴について

今回のように、小説作品発表の媒体として twitter が利用されるのは『翼』が初めてのケースではない。著名なケースでは米国の作家 Jennifer Egan が、2010年5月25日から9日間にわたり雑誌「The New Yorker」(Condé Nast Publications 刊)の公式 twitter アカウント上で短編 SF 小説「Black Box」の連載を行ったケースがある。同作は『翼』とは異なり twitter での連載が初出となったケースだが、Jennifer Egan のように著名な作家が twitter 上で（部分の紹介やダイジェストではなく）新作小説を発表する試みが当時注目された。またコミュニティ領域においては、前掲拙稿でも触れたハッシュタグ「#twonovel」を利用して twitter 上で小説を発表する「ツイノベ (twonovel)」がある。いずれも twitter の情報伝播力・拡散力によって作品（時には作家自身）をより多くの人々に周知できる点、また読者にとっても手軽に作品に触れることができる点などがメリットと言える（『twonovel』については後述）。

一方でテキスト作品の発表媒体として twitter を見た場合、1回の投稿文字数が140字に制限されている点、またルビやフォントの変更といった書式の設定ができない<sup>12</sup>点など非常に制限が多く、作り手の側による版面のコントロール（自身の文章を読者に対してどのように提示、訴求するかの設定）が事実上できないことから、従来の小説をそのまま発表する用途に向いているとは言い難い。特に140文字という字数制限は単にボリューム面の問題だけでなく、その制限を踏まえて地の文や会話の繋がりなどを考えなければならないことを意味しており、文体や作品の構成に与える影響も無視できないものがある。その点において twitter は作家にとって魅力的であると同時に「使い方の難しい」媒体であると言えるが、それでも「あえて twitter が選ばれる理由」は一体どこにあるのか。再び『翼』のメディア分析に戻って考察してみたい。

## 6. 『翼』 twitter 連載で行われた交流

『翼』の twitter 連載を読み進めていくうちに気付くのは、所々に小説本文とは異なる「読者」のコメントが挿入されている点である。（以下、各ユーザーによるツイートについては投稿アカウント名とその日時、URL を付記した）例えば、

---

<sup>12</sup> 投稿内での改行に対応したのは2013年3月

@kounoekira いつもありがとうございます。このようなスタイルだと、一文一文を丁寧に、また、一つ一つの言葉をかみしめるように、じっくりと読めますね。いつも、丸飲みするかのようなスピードで、一気に読み干していたんだと反省（笑）。これからもよろしくお願い致します。

(cherryly2013,2013-06-25 08 : 48 : 23 <https://twitter.com/cherryly2013/status/349313084629860352>)

このツイートではあるユーザーから『翼』の twitter 配信を行っているアカウント「@kounoekira」に返信をされたものをリツイートしているが、別の形式では

白石一文さんの「翼」を Twitter で読んでます。twitter で読む良いところは、好きな場面、フレーズを、お気に入り登録して持ち歩けることだと思う。携帯と言う秘密の箱に、好きな言葉を持ち歩ける。

(@Ricenimisosoup, 2013-07-10 21 : 34 <https://twitter.com/Ricenimisosoup/status/354941738139385857>)

のように、ユーザーが独自にツイートしたものを配信アカウントが拾ってリツイートしているものもある。今回の『翼』連載中に直接配信アカウントからリツイートされたコメントは 16 件<sup>13</sup> だが、ここからさらにそれぞれのツイートに返信やリツイートがつくケースがあるため実際に『翼』をめぐる交換されたツイート数は相当数に上ったものと推測される。また、配信アカウントからリツイートされるものだけでなく、連載中の本文ツイートそれぞれもまた「お気に入り」<sup>14</sup> リツイートの対象となるため、本連載の読者は誰が（どのくらいの読者が）、どの文章やセリフを気に入っているのか、あるいはそれぞれにどのような感想を抱いたのかを互いに共有することができる。

これは「小説を読む」という本来個人的な行為を twitter の機能を利用して他者と共有する「ソーシャル（社会関係的）読書」とも言えるもので、ニコニコ動画や 2ちゃんねるの「実況スレッド」で行われているような作品への感想や盛り上がりの共有、また作品や作者に関する情報の補完をユーザー間でし合う、そのことによってまた新たな交流を生むといった個人的読書にはない活動が見られる。同時に、読者それぞれが自分の気に入った文章や登場人物のセリフを抜き出し、一種の「箴言集」として自分の twitter タイムライン上（あるいは togetter<sup>15</sup> 再構成することもできる（複数の作品を組み合わせる事も可能）。従来のブログや掲示板による発表や独自のアプリケーションを介して作品を閲覧する電子書籍コンテンツと比較した場合一覧性や書籍版面の再現性には劣るものの、こうしたコミュニケーション性のある作品の楽しみ方が可能な点が twitter を通じた小説作品展開の特徴であると言える。<sup>16</sup>

さらに第 3 節、4 節で度々引用したように、作者である白石自身もまたコメントを本連載中に自身の twitter アカウント (@kaz\_shiraishi) 上に投稿、それが『翼』配信アカウント上にリツイートされている。最初にリツイートされた白石の発言は、2013 年 7 月 13 日の光文社書籍販売部長・渡辺浩章氏

<sup>13</sup> Togetter（注 13 参照）でまとめられたもの数を集計した。

<sup>14</sup> 他ユーザーのツイートを保存（ブックマーク）しておく機能。該当のツイートを誰が「お気に入り」にしたのかは基本的に公開されている。リツイートも同様。

<sup>15</sup> <http://togetter.com/> twitter 上に投稿されたツイートを任意のテーマ、ハッシュタグ等に応じて整理編集し表示できるウェブサービス。本稿で採り上げた『翼』も togetter 上にまとめが作られ、一覧することができる。（<http://togetter.com/li/489281>）

<sup>16</sup> 「ニコニコ静画」やスマートフォンアプリを通じて利用する「Vine」など、動画像や音楽コンテンツを含め、同様のコミュニケーション性をもった作品享受の機能を提供しているサービス、アプリケーションも存在する。

「Vine」: <https://vine.co/>

「ニコニコ静画」: <http://seiga.nicovideo.jp/>

の退職と出版社立ち上げを報じるもの<sup>17</sup>だが、連載終盤の7月30日に前掲の「毎日、少しずつ読みながら、『翼』という小説は、光文社じゃない方がよかった気がする。作品と版元との相性があると最近感ずるようになった。現在「小説すばる」に連載している『彼が通る不思議なコースを私も』はなんとなく集英社とじっくりきているような、そんな感覚がある…。」（第4節参照）にはじまる本作の執筆テーマに関わる4つのツイートを連続して行った。

こうした作者による作品への発言（ネットコミュニティ的な言い方をすれば「降臨」）は、創作の背景や作者の意図を知ることができる反面で、読者にとっては先入観無しに作品を楽しむことを妨げかねない行為でもあるが、本作が既発表作品であったということ、またインターネット上で自作の全文を公開するという白石にとってははじめての、また出版界全体にとってもレアなケースであったため、その舞台裏を明かす意味も含めて非常に興味深い内容（既に本作を読んだ読者に対しては一種の“サービス”として機能した）であったと言うことができる。従来の書籍であればあとがき、あるいは文庫版の「解説」のページに挿入されるような内容だが、本作では上記の発言がtwitterの機能上、小説本文の投稿の合間に挿入される形（映像作品における「オーディオ・コメンタリー」に類似している）で掲載され、twitter連載ならではの臨場感を演出した。

そもそも今回白石が行った『翼』のtwitter連載は、前掲の通り同作の単行本刊行の際の売れ行き、読者へのアピールが不本意な結果であったことから、白石が「採算を度外視してでも多くの人に読んで欲しい」として、配信アカウントのフォロワー数（そのアカウントが発信するツイートの「読者」に該当する）が10,000人を超えたら全文を公開すると宣言することではじまった<sup>18</sup>企画性の強いものであった。言い換えれば、今回の『翼』twitter配信は単なる小説作品配信というだけでなく、直木賞作家である白石の作品が無料で公開されるか否かを読者が決定し、公開決定後は作者本人や配信担当者がその内幕を同じタイムライン上で呟いて読者に公開するという一種の「イベント」であったと見なすことができる。

こうしたフォロワー数や既刊の売れ行きが規定数に達した場合にのみ作品の無料提供、あるいは新作の刊行を行うといったユーザー参加型のマーケティングはこれまでさまざまな書籍や映像・音楽コンテンツを展開する際に採られてきた手法であるが、本作も「著名作家が作品をtwitter上で無料で配信する」という話題性だけでなく、twitterを利用することで読者自身がアカウントフォローや配信された小説のリツイート等を通じて作品展開に参加し、またその中で作者本人が作品についてコメントを出すというイベントが加わったことで、単純に「ウェブサイトやブログ、電子書籍ファイルを使って作品全文を公開する」展開を行うよりもメディア的、商業的効果を高めたと言えよう。

文字数制限や反面再現性の弱さといったさまざまな問題やリスクがありながらも、白石（と配信企画・担当者）が作品公開を行うメディアとしてtwitterを選択した背景には、（SNSとしての普及率の高さ、ユーザー数の多さは当然としても）こうした柔軟かつ読者の関心や参加モチベーションを高めるメディア展開がしやすい点があったのではないだろうか。

<sup>17</sup> 参照：[https://twitter.com/kaz\\_shiraishi/status/355832398690271232](https://twitter.com/kaz_shiraishi/status/355832398690271232)

なお渡辺氏は『翼』配信アカウントの管理人でもある。同アカウントは、配信終了後に『翼』の文庫化プロジェクト用アカウントとして継続されている（2013年9月現在）

<sup>18</sup> 前掲の5月28日読売新聞朝刊「代表作 無料でツイッターに 白石一文さんの「翼」

## 7. 類似例 1 「LINE ノベル」と「#twonovel」

現在、上記の twitter と同じような機能と特性を持つ（ソーシャルメディアとしての内実は全く異なるが）として「LINE」が挙げられる。

「LINE」はスマートフォンやパソコン上で動作する専用アプリケーションを経由して無料通話やテキストメッセージ（トーク）機能を利用できるサービスだが、トーク内のテキストにマンガやアニメ等のキャラクターを使った「スタンプ」<sup>19</sup>と呼ばれる専用画像を挿入できる機能が広く支持され、2011 年以降 10 代から 20 代といった twitter や Facebook よりもさらに若い年齢層を中心にユーザー数を急拡大している。同サービスでは 2012 年 6 月からそのトーク機能を利用して各ユーザーにテキストによるゲームコンテンツ「トークノベル」を配信していた（『情報科学研究』2012 No. 33 掲載の拙稿参照）。この「トークノベル」は小説形式による物語の各所に分岐点（選択肢）を設置し、ユーザーがその選択肢を選ぶことによってその後の展開が変化するというコンシューマー機における「サウンドノベル」ジャンルに近い構造を持つものだった。しかし同コンテンツは第一作の「リフレイン」のみで配信が終了、代って 2013 年 6 月より同じくトーク機能を通じて小説作品を配信する「LINE ノベル」の配信を開始している。「LINE ノベル」は前掲の「トークノベル」とは異なり選択肢による展開の変化等のゲーム性は付加されていない。LINE アプリケーション上で専用の ID<sup>20</sup> を登録すると、小説各回ページへのリンク（1 作品あたりの配信回数は 7～8 回）がトーク画面に配信されてくる仕組みだ。2013 年 9 月時点での配信作品は『陰陽探偵・中津川玲子の 14 日間』（眞邊明人）、『君のために今は回る』（白河三兎）、『クロストライプ ～境界の魔女と眠り見たち～』（月島総記）の 3 作品で、サスペンス、ミステリー、ファンタジーといったエンターテインメント系のジャンルを中心に構成されている。また、コンテンツ提供開始と同時に「第一回 LINE ノベル大賞」としてユーザーによる小説作品の投稿を募集<sup>21</sup>しており、「LINE」と類似したユーザー年齢構成（10 代～20 代の若年層）である「ケータイ小説」<sup>22</sup>に近いコンテンツ供給の手法を採用している点が注目される。

一定分量ずつに分けて（登録を行った）不特定多数のユーザーに向けて配信する方式などは本稿で採り上げている『翼』をはじめとした twitter による小説配信と類似しているが、「LINE ノベル」は以下の点が twitter 配信と大きく異なっている。

- ・専用アプリケーションを使用して閲覧するため、「LINE」ユーザー以外には基本的に閲覧できない
- ・上記の理由により、不特定多数のユーザー間での作品共有（twitter では「リツイート」や「お気に入り」を介して行われていたコミュニケーション活動）は限定的なものとなる。
- ・一方で、上記のように閲覧環境としては独立して（閉じて）いるため、従来の書籍による小説、ケータイ小説と同じような読み方をする分には遜色がない。また文字数の制限がない分読みやすい形で配信できる部分もある。

<sup>19</sup> 「喜び」や「笑い」などのエモーショナルな表現、あるいは「お腹が減った」「元気？」など簡単なメッセージを表現したキャラクターイラストを送信できる。その機能や使われ方はアスキーアートや絵文字に類似している。

<sup>20</sup> LINEID。LINE のサービス内で特定のユーザー、公式アカウントを登録する際に使用する ID。@ 以下にそれぞれが英数字を登録して作成する。

<sup>21</sup> 第 1 回募集は 2013 年 8 月 15 日に締め切られた。応募資格はプロ、アマチュアを問わず、「大賞」受賞作については講談社より書籍化される旨が告知されている。

<sup>22</sup> 拙稿「ソーシャルメディアの普及とテキスト作品制作・流通の変化について」（『情報科学研究』No.33 掲載）を参照

こうした点から「LINE ノベル」の今後としてはユーザー応募作品の書籍化や有料作品の配信など、類似したユーザー年齢構造を持つケータイ小説の手法と読者を取り込んだ展開をしていくことが予想される。それ以外にもスマートフォンの扱いになれた若年齢層に適合したコンテンツ、特に既存の書籍コンテンツでは「ライトノベル」ジャンルに該当する作品群に特化したコンテンツチャンネルとして継続していくことが予想されよう。(逆に言えば、LINE というサービスの特性上、それ以外の年齢層の読者に訴求することが難しく、また LINE 側もそうした展開を狙ってはいないものと思われる)

『翼』twitter 配信と「イベント性」の面で類似した特性を持つ活動としては、前掲のハッシュタグを利用した「#twnovel」の投稿活動が挙げられる。この活動について同じく前年度拙稿でも採り上げたが、基本的には 140 字という twitter の投稿文字数内（ハッシュタグの文字数も含まれる）で物語や描写を完結させる超短編小説、あるいは自由詩に近い形式の創作活動で、ケータイ小説作家の内藤みかによって提唱された活動である。「物語を完結させる」とはいえそのボリュームに大きな制限が課せられているため、ある一コマの場面における登場人物の心の動きや状況の変化を描写したものや、いわゆる「小話」の形式をとった作品が多い<sup>23</sup>。

この場合、twitter の持つ文字数制限は制限ではなくむしろ俳句や短歌のルールと同様に「その中で作品をどう上手くまとめるか」という作者の技量やテーマへの対応力を示す指標となっている（一種の“お題”として機能していると言って良いだろう）。この場合もユーザー間での作品のリツイートおよび「お気に入り」へ登録、他者の作品と同じテーマや書き出しを使った派生作、二次創作など、作品制作・鑑賞そのものと同様かそれ以上に、twitter を経由した創作者同士のコミュニケーションとイベント性を主軸として、2013 年現在でも活発な創作活動が行われている。

上述のように「LINE ノベル」が既存・新進のプロ作家による作品発表の場としての色彩が強いものであるのに対し、「#twnovel」はプロ作家の活動よりもさまざまなユーザーが twitter 上で作品を発表し交流することを主眼としているという特徴がある。言い換えれば前者が既存のコンテンツチャンネル（出版社による作品制作・流通・販売）の延長・代替的位置づけにあるのに対し、後者はこれまでネット上の掲示板・ウェブサイトコミュニティで行われていた同様の活動の代替・延長線上にあると言って良いだろう。同様に前者では作品に対してどれだけ（サービスプロバイダーである LINE や提携した出版社側が想定した）読者に訴求するかという「商品」としての意味も含めた完成度が問われる場であるのに対し、後者は「商品性」の強さと完成度ではなく、むしろ読者のリツイートや「お気に入り」登録によってコミュニティ参加や創作のモチベーションを得る、特定の作品に対する感想を他の読者と共有することによって一体感を得るといった一種の偶発性やライブ感が志向される場であるという違いが生じている。いずれもソーシャルメディアを使って小説（テキスト作品）を展開することでそのユーザーを読者としてとりこみ、あるいは提供される作品の幅を広げていこうとしている点では一致している。その一方で、特に前者に言えることであるが、その活動継続性がサービスプロバイダーの経営判断に依存しているという弱みを抱えているという点に留意が必要であろう（「LINE トーク」のように、開始後 1 年間継続しなかった例もある）。いずれにせよ、「ニコニコ動画」等先行する事例

<sup>23</sup> 作例として、以下 URL を参照。なお、これらの作品については著作権上の引用可能範囲の判断が別れることが予想されるため、本文引用は行わず掲載 URL の紹介にとどめた。

@laybacks

<https://twitter.com/laybacks/status/244139065551765504>

・@ce1039

<https://twitter.com/ce1039/status/284677015611772928>

・@1\_dark

<https://twitter.com/23novel/status/328521738491154432>

からも類推されるように、ソーシャルメディアにおいて各種のコンテンツを展開していく上では、既存媒体の代替機能を提供するだけでなく、コミュニティの自発的活動とコンテンツの集積を喚起し、それをいかに維持していくかが重要な問題となってくる。

### まとめ 『翼』 twitter 連載の意義

以上のことから今一度全体を総括してみよう。白石一文による『翼』の twitter 連載は単に既存作品をネット上に公開したというだけでなく、次の2点の効果を生んだ活動であったと総括することができる。

1. 出版社や流通手段とのミスマッチングなど、作品にとって不本意な（あるいはそう思われる）状況を作者が積極的に修正、あるいはその代替手段を講じることができる可能性を示したこと。

2. twitter のもつ交流機能と情報拡散機能を使い、それまで『翼』に触れたことの無かった読者にもその作品の存在を知らしめることができたこと。また、すでに作品を読んだ読者に対しては作者の創作意図や「出版社との相性」についての言及など、刊行済みの単行本にはなかった情報に触れることができたこと。

上記2点はいずれも、ソーシャルメディアの整備と機能拡張によって「従来は出版社あるいはメディア企業を経由して行われていたものが、作家個人かそれよりもずっと規模の小さな活動によって代替できるようになった」ことを示すものであると言える。

同時に、新たな読者層への訴求や前節で触れた『翼』 twitter 公開の持つ「イベント性」を実現することを考えた場合、登録ユーザー以外は閲覧できないような閉鎖性の高いソーシャルメディアでは前者の用を成さず、Facebook や mixi のような日記、ブログ形式による作品掲載では「ある程度白石の作品（もしくはウェブサイト経由で小説を読むことにある程度）親しんだ読者」以外への訴求性が乏しくなる。また twitter は、その手軽さとタイムライン機能による共時性、実況性（ひとつの出来事やコンテンツを大勢のユーザーで共有体験するのに向いた特質）に加え、同様の機能を持つ他のソーシャルメディアより遙かに多いユーザー数とその一般社会への知名度・定着度をもっていた点で、上記2点の効果を達成する上では現時点でもっとも適したものであったと言える。

一方、こうした形で獲得したイベント性や作品の知名度、あらたな読者を従来の出版産業と同様の形態で「販売」につなげていくことは、現時点（2013年9月時点）では大きなリスクを伴うのが実情である。そもそも twitter は一定以上の長さを持つテキストコンテンツを配信するには向いていないこと、単体での表現力も限定されている上に有償コンテンツ取引のための機能も実装していないこと等がその理由だが、『翼』 twitter 配信のように一種のイベント企画としての方向付けがなければ単なる「作品の無料公開」以上の意味を持ち得ない。またコンテンツ配信にあたってイベント性の強い企画を過剰に強調・乱発すること<sup>24</sup> 読者への訴求力を持つ反面、濫発された場合作家、作品のブランド力を減退させ、あるいはネットコミュニティからの批判、反発を招きやすくなるリスクを抱えている点に充分留意することが必要となるだろう。

現時点において、これまで述べてきた twitter による作品公開企画がどこまで同作の商業的成功に寄

<sup>24</sup> テキストコンテンツの他メディア展開（映画化、マンガ化等）にからめての「無料公開」や「twitter 限定」の作品を多くの作家が続けて提供することなどが該当する。

与するかはまだまだ未知数である。しかしながら、今回の企画の経緯からこれまで「作者→出版社→読者」という固定したラインによる小説作品の展開方法と流通網が変化の時を迎えていることが明確になりつつある。特に一つの作品を作者自らが（出版社の手を経ずに）プロデュースし流通させ、それによって新たな、あるいはそれまでとは異なる読者層への訴求を図ることのできる環境の可能性が見えてきたと言えるのではないか。すなわち、単に電子書籍の新作を作って売っただけでなく、作家自身による作品の「再出版」<sup>リ・パブリッシュ</sup>のための環境が構築されはじめているのである。そのことはまた、読者の側にとっても作品についての情報をより多く入手し、あるいは他の読者との交流を行うことで新たな作品解釈や読書体験への道が拓ける可能性を秘めている。

その点から言えば、白石一文およびその周辺が今回の作品公開にあたって「自身の既存作品を SNS を使って公開する」という行為のメディア的な意義を十分に理解しマーケティングを行ったことが推察できる。単に「コンテンツ流通チャンネル」としての利用だけでなく、こうした事例が積み重ねられ、広がっていくことで「ソーシャルメディアを使って作品を公開する（刊行する）」ことの意義と可能性がより広がって行くであろう。将来的には、twitter だけでなく、「Tumblr」や「facebook」等他のソーシャルメディア（SNS）でも同様の動きが進んでいくと思われるが、そのためには作家、出版社そして読者の立場それぞれからの著作権面での議論と法整備も必要となってくる。今後、そうした法整備面での動きも踏まえながらテキストコンテンツ、特に従来の書籍配信に適したソーシャルメディア環境の構築とその可能性についての研究を進めていきたい。

#### 参考文献

- 『情報通信白書 平成 25 年度版』、総務省、2013 年
- 『ソーシャルメディア白書 2012』、翔泳社、2012 年
- 白石一文『この胸に深々と突き刺さる矢を抜け』、講談社、2009 年
- 白石一文『ほかならぬ人へ』、翔泳社、2009 年

#### 参考 URL

- ・白石一文『翼』 ツイッター連載小説  
<http://togetter.com/li/489281>
- ・Black Box : Jennifer Egan's Twitter short story  
<https://dev.twitter.com/media/twitter-moments/authors/jennifer-egan-black-box>